



第216号 発行所 一般社団法人 芝蘭会 京都大学医学部同窓会

主な内容 ② 新任あいさつ ③ 校友会・KMS-FUNDだより ④ 新任あいさつ ⑤ 新任あいさつ/退任あいさつ ⑥ 退任あいさつ/同窓会だより ⑦ 支部だより(三重) ⑧ 支部だより(大阪) ⑨ 人事異動・会員計報

令和6年6月22日(土) 芝蘭会館別館において、芝蘭会理事...

令和6年度 芝蘭会理事会/評議員会 定時総会 教育助成事業の 充実ぶりと 産学連携活動の 新展開に 高まる期待



- ① 定時総会・評議員会・理事会の議事録署名人名について ② 令和5年度事業報告について ③ 令和5年度収支決算並びに財産目録について ④ 理事・評議員の選任について ⑤ 公益目的支出計画報告書について ⑥ その他

議案② 令和5年度事業報告 教育助成事業、普及啓発事業、学術講演会等開催事業の内容について活発な議論が行われ、原案どおり承認された。

また、産学連携事業では、産学情報交流部の設置後20年を超える節目を機に、新しい産学連携活動支援の在り方が検討され、令和6年度以降3年間にわたり、医学研究科附属医療DX教育研究センターと連携のうえ、産学連携による研究成果を社会実装するための支援事業を実施することが報告された。

議案③ 令和5年度収支決算並びに財産目録 一般会計収支計算書及び財産目録について詳細な説明が行われ、異議なく承認された。

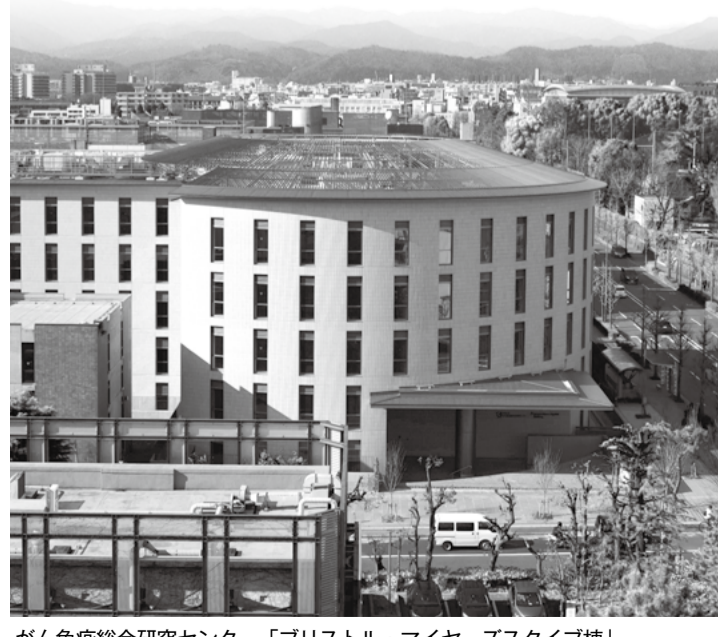
議案④ 理事・評議員の選任 理事の選任については、岸本誠司理事は任期満了のため、後任として東京大学定量生命科学研究科教授の新蔵礼子氏(昭和61年卒)を選任することについて意見を求めたところ、異議なく承認され、選任された。

議案⑤ 公益目的支出計画報告書 京都府知事に提出する公益目的の支出計画実施報告書について説明が行われ、異議なく承認された。

また、任期満了に伴う以下11名の理事の再任についても、異議なく承認された。

評議員については、以下10名の退任に伴う後任候補について意見を求めたところ、いずれも異議なく承認され、選任された。

議案⑥ その他 芝蘭会各支部の会員の在籍基準を明確にするための意見交換が行われた。京都支部では、勤務地又は自宅が京都市内の会員を支部会員としている事例が示されるなど、各支部会員の在籍基準や支部の運営について種々意見交換が行われた。



がん免疫総合研究センター「プリストル・マイヤーズスクイブ棟」

令和6年度 春の叙勲 瑞宝重光章 橋本 信夫 (昭48年卒) 元国立循環器病研究センター理事長 瑞宝中綬章 千葉 幸夫 (昭46年卒) 元国立病院機構福井病院院長

# 新任あいさつ

## 糖尿病学、内分泌代謝学、病態栄養学の更なる発展へ 新規医療創成、次世代人材育成に注力



京都大学大学院医学研究科 糖尿病・内分泌・栄養内科学 教授 矢部 大介

2024年3月1日より京都大学大学院医学研究科糖尿病・内分泌・栄養内科学教授を拝命しました矢部大介です。私は1992年に京都大学医学部入学後、本庶佑教授のもと分子生物学を学んだことを契機

し帰国、京都大学医学研究科分子生物学助手として充実した研究生生活を送りました。しかし、医学部在学中に井村裕夫教授から受けた「臨床で研鑽を積んで問題意識を深め、研究に取り組みむべし」という助言から一念発起、2007年から関西電力病院にて清野裕教授のもと糖尿病診療のいろはを学び、以後、糖尿病、内分泌疾患、栄養代謝疾患の診療に従事すると共に、清野裕教授・故清野進教授のもと膵β細胞とインクレチンの研究に邁進するようになり

ました。2016年から福垣暢也教授のもと京都大学医学研究科糖尿病・内分泌・栄養内科学特定准教授を務め、2018年から岐阜大学医学系研究科内分泌代謝病態学(現糖尿病・内分泌代謝内科学)教授に着任、5年間教室を主宰し、京都大学に戻つてまいりました。日本人を含むアジア人は他民族と比してインスリン分泌能が

低く、過食や運動不足によるインスリン抵抗性の軽度増大で糖尿病を発症するため、アジアで激増する糖尿病の発症・重症化阻止には膵β細胞研究が急務です。京都大学は膵β細胞からのインスリン分泌を促進するインクレチン研究において世界を牽引し、iPS細胞由来膵β細胞の移植、膵β細胞量の可視化技術の開発など革新的な研究も進めています。さらにインスリン分泌障害の複雑な遺伝素因解明に向け、単一遺伝子異常による糖尿病の研究も推進しています。これら研究を更に発展させ、糖尿病が「治る病気」となるよう国内外の研究機関や企業と連携し、次世代医療の創成を目指します。糖尿病医療の進歩は、一人ひとりの病態や社会経済状況等を踏まえたパーソナライズドメ

ディシンを可能にしつつありますが、糖尿病のある人の実に4人に1人が治療を受けていません。国の糖尿病性腎症重症化予防プログラム策定・検証への参画、岐阜県における行政・医師会との連携による糖尿病対策推進の経験を活かし、京大病院においても広範な連携を図り、データサイエンスを用いた健康医療データの分析やIoT/ICTを活用した診療支援システムの開発にも注力し、糖尿病に対する包括的な取り組みを推進します。研究と診療の推進には、多様な課題を共に克服できる力強いチーム構築が欠かせません。学部教育および卒業後教育を通して、次世代を担う若手に糖尿病、内分泌疾患、栄養代謝疾患に関する研究と診療の魅力を伝え、多様な人材がやりがいを感じながら活躍できる環境を整備していきます。

新たな気持ちで全力を尽くし、母校に貢献ができるよう粉骨砕身努めます。芝蘭会の先生方には、ご支援とご指導をお願い申し上げます。 当教室は2007年に戸井雅和先生が初代教授として就任され、開講しました。女性の癌罹患率第1位の乳癌診療の個別化最適化を進めると同時に、斬新な基礎・臨床研究からエビデンス、コンセンサスの発信、そして多くの優秀な人材を育成され、乳癌腫瘍学の発展に大きく貢献されてきました。後継として任命いただきましたこと、大変光栄に存じますとともに身の引き締まる思いであります。

私は1993年に大阪大学医学部を卒業のち、関連病院での外科研修期間に、診断から手術・薬物療法と幅広く、そして一人の患者さんと長くお付き合いできる乳癌診療に深く興味を持っています。医学部学生・大学院生を教育する者として、次世代の医師・医学研究者が国際的な場で活躍し、貢献できるようサポートすることが私の使命だと考えております。 芝蘭会の皆様との新たな出会いを通じて、本学医学部・医学研究科の国際化・教育・研究の発展に貢献できるよう尽力してまいります。今後とも皆様からのご支援とご指導を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

## 患者さん中心の診療・研究・教育を实践 優秀な乳癌専門医の育成を使命に



京都大学大学院 医学研究科 乳癌外科学 教授 増田 慎二

2024年4月1日付で、乳癌外科学教授を拝命いたしました。芝蘭会会員の皆様にご挨拶申し上げます。 当教室は2007年に戸井雅和先生が初代教授として就任され、開講しました。女性の癌罹患率第1位の乳癌診療の個別化最適化を進めると同時に、斬新な基礎・臨床研究からエビデンス、コンセンサスの発信、そして多くの優秀な人材を育成され、乳癌腫瘍学の発展に大きく貢献されてきました。後継として任命いただきましたこと、大変光栄に存じますとともに身の引き締まる思いであります。

## 留学経験を活かし、医学教育・研究の国際化に貢献



京都大学大学院医学研究科 医学教育・国際化推進センター 国際化推進部門 教授 THUMKEO Dean

令和6年4月1日付で京都大学大学院医学研究科医学教育・国際化推進センター国際化推進部門の教授を拝命いたしましたTHUMKEO Deanです。この場をお借りして芝蘭会会員の皆様にご挨拶申し上げます。 本学医学教育・国際化推進センターの歴史は、平成16年に設

立された医学教育推進センターに遡ります。初代教授は平出敦先生が務められました。その後、医療・医学のグローバル化に伴い、平成29年に2代目教授の小西靖彦先生のご尽力で国際化推進部門が加わり、現在の医学教育・国際化推進センターへと発展いたしました。

今年には本部門設立7年目を迎えますが、初代部門長のShohar Youssefian教授のリーダーシップのもと、本学医学研究科の医学英語教育と国際化推進・国際交流に貢献してまいりました。現在、当センター国際化推進部門には私を含めて8名のInternational facultyが所属し、連携しながら、ILAS英語授業やマイコース留学の支援など国際化に向けた医学教育・研究活動を続けております。

私は平成21年に大阪大学医学部を卒業しました。日本で高等教育を受ける前はアメリカとタイで過ごしましたが、現在に至るまで28年間日本で留学生活を続けております。この間、日本語はもとより、日本文化や日本の科学および医学の進歩を学ぶ、留学の様々な恩恵を受けました。一方で、言葉の壁や多様性の理解不足など、留学特有のさま

ざまな問題にも直面し、乗り越えてきました。これらの経験を活かし、本学医学部と医学研究科の留学支援、国際交流、そして国際化に貢献したいと強く思っております。 研究に関しては、平成25年に本学医学研究科神経細胞薬理学教室(成宮周教授)で博士号を取得し、その後、カリフォルニア大学サンフランシスコ校(UCSF)医学部病理学科学科(Mathew Krummel教授)で短期留学を経験しました。研究の過程でたくさんの素晴らしい研究仲間や共同研究者と出会い、皆さんのお力を借りながら、現在ががん免疫回避のメカニズム解明と治療応用に関する研究に取り組んでおります。私の研究の特徴の一つとして、従来のウェット実験とシングルセルRNAシークエンスといったドライ解析をシームレスに組み合わせる点が挙

げられます。今後は新たな分野にも挑戦し、オリジナリティのある研究を展開したいと考えております。 近年、日本ではグローバル化がさらに加速しており、海外出身の患者が増加しています。このような中で、医学生や英語コミュニケーション能力や多文化理解の重要性はますます高まっています。医学部学生・大学院生を教育する者として、次世代の医師・医学研究者が国際的な場で活躍し、貢献できるようサポートすることが私の使命だと考えております。

芝蘭会の皆様との新たな出会いを通じて、本学医学部・医学研究科の国際化・教育・研究の発展に貢献できるよう尽力してまいります。今後とも皆様からのご支援とご指導を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。



# 京都大学医学部 校友会・教育研究支援基金

(KMS-FUND) だより

## 学習・研究環境の さらなる充実を



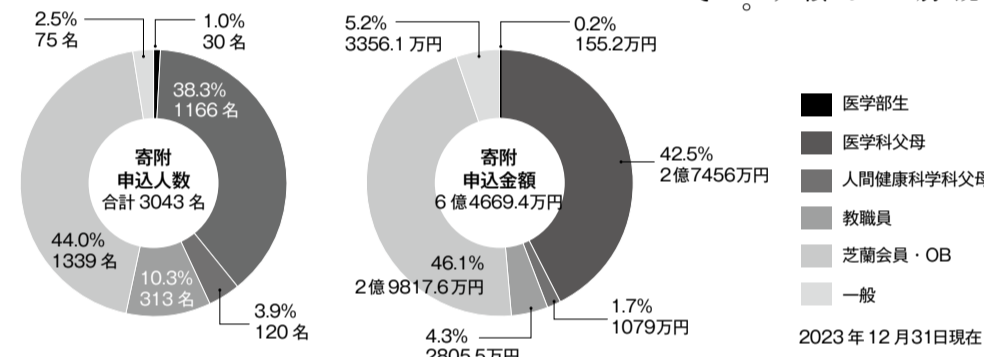
KMS-FUND委員長(2024年)  
画像診断学・核医学 教授  
中本 裕士

令和6年度の京都大学医学部教育研究支援基金(KMS-FUND)委員長の任命しました中本裕士です。どうぞよろしくお願ひいたします。

KMS-FUNDは、平成19年に「学生の学習や研修活動などの教育支援、大学院生の研究活動などの研究支援」を目的として設立された基金です。この基金の創設により、医学部における学生の学習・研究環境を充実させるための寄付を受ける窓口が整いました。これまでの成果のひとつとして、医学部学生会館の建設(平成22年竣工)が挙げられます。現在学生会館はクラブ活動の部室や24時間利用可能な自習室として活用されており、平成26年度からは清掃事業を業者委託し、備品修理やエアコンの追加設置も行っています。

### 令和6年 教育研究支援基金(KMS-FUND) 委員会委員

委員長	中本 裕士	画像診断学・核医学 教授
	西谷 陽子	法医学 教授
	竹内 理	医化学 教授
	大森 孝一	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学 教授
	今中 雄一	医療経済学 教授
	山田 重人	人間健康科学系専攻生体構造学 教授
	山田 均	芝蘭会事務局 局長
	井本 憲	医学研究科事務部長



270万円を14人の学生に、また研究支援金計243万円を10人の学生に支援いたしました。新型コロナウイルス感染症の規制緩和により、昨年は対面での会合も順次再開しています。3月に卒業祝賀会、4月に入学祝賀会、9月に第16回総会・講演会を現地開催し、卒業および入学の祝賀会ではみなで喜びを分かち合うとともに、総会・講演会では竹内理教授に「ウイルス感染に対する免疫応答とその制御」、小林恭教授に「泌尿生殖器の薬剤耐性克服に向けて」のご講演をいただき、佐藤文隆名誉教授からは「顕微鏡で宇宙を見る」と題する特別講演を賜りました。

お陰様で基金の方は令和5年12月31日現在、累計総額6億4669万4千円となりました(寄附者数3043名)。皆様の御支援にこの場をかりて

### 令和4年若手研究者優秀論文賞 KMYIA 受賞者の言葉

所属・身分は、論文発表時

#### 九野 宗大

医学専攻(細胞機能制御学) 博士課程 4 年生

この度は京都大学医学部若手研究者優秀論文賞を賜り、大変光栄に存じます。研究指導を頂きました岩井宏教授をはじめ、細胞機能制御学講座の皆様から感謝を申し上げます。令和6年度は新型コロナウイルス感染症前と同様の現地開催のイベントを予定しています。

また2024年は京都大学医学研究科・医学部創立125周年の記念すべき年にあたり、記念事業募金を進めています。芝蘭会、校友会ならびに関係の皆様方におかれましては、医学部および大学院学生の充実した研究・教育を可能とするために、より一層の御支援を賜りたく、心より御願ひ申し上げます。

研究は京都大学医学部若手研究者優秀論文賞(KMYIA)という名誉ある賞を賜りましたこと、大変光栄に感じております。本研究の遂行にあたり、ご指導ご鞭撻いただいた竹内理教授をはじめとして、共同研究で御尽力頂いた学内外の先生方、医化学研究室の皆様、並びに研究生活をサポートしてくれている家族に、この場をお借りして厚く御礼申し上げますと思います。

私はもともと工学部の出身でタンパク質構造解析を勉強していました。その知識を医学界に貢献したいと思い、京都大学医学研究科の門を叩きました。自然免疫と炎症疾患に興味を持ち、竹内理教授の指導の下、免疫調節を基盤とする疾患治療法の開発に邁進して参りました。レグネー1は炎症反応や免疫応答を調節するRNA分解酵素として働き、サイトカインなど

あることは、上記経路が存在することを示唆しています。私はこの輸送経路を明らかにすることで鉄代謝調節とオートファジーの2つの分野への貢献ができることを、研究に着手しました。結論としては、鉄処理初期にはNCOA4と呼ばれるフェリチン専用のオートファジーアダプターが凝集体を形成し、フェリチンから隔離されることで、フェリチンによる鉄貯蔵を促進してしましました。一方で、鉄処理が遷延するとフェリチンが過剰に蓄積し、また細胞は鉄の取り込みを抑制するため、細胞は鉄処理初期と比較すると鉄欠乏になります。これを解消するためにNCOA4の凝集体がフェリチンを取り込み、リソソームへ輸送し、細胞の鉄濃度を精密に調節していることが分かりました。以上の結果から、

炎症や免疫細胞活性化に関わるタンパク質のmRNAのシステムループ構造を認識して分解することで、免疫応答のブレーキとして機能しています。レグネー1は自己免疫疾患の病態に関与することが明らかとなっており、これを利用した治療法の創出は未だ探求の域を出ておりませんでした。

受賞対象となった「ステムループ標的アンチセンスオリゴ核酸によるレグネー1の発現増強は炎症性疾患を軽減」という論文において、レグネー1の自己分解を調節する手法を開発いたしました。レグネー1 1 mRNAのステムループ構造と相補的なアンチセンスオリゴ核酸を細胞に導入することにより、レグネー1の自己分解が抑制され、レグネー1による免疫のブレーキを強める作用が増強することが明らかになりました。具体的にはマクロファージの

末筆ではございますが、教育研究支援基金にご寄付いただいた方々に心より感謝申し上げますと共に、校友会の今後の益々の発展を祈念いたします。

現在、上記経緯から私たちが体で酸素が関わる現象に興味を持ち、NYU Medical Centerでがんや個体での酸素利用とそれに関わる代謝の変容についての研究をしています。今回の受賞を励みに、更に医学の発展に貢献できるように研鑽を積んでまいります。

### 第17回 京都大学医学部校友会 総会・講演会のお知らせ

日時 令和6年9月28日(土) 午後  
場所 芝蘭会館本館 稲盛ホール  
特別講演会  
申し込み受け付けは おって連絡いたします。



令和4年のKMYIA授賞式

# 新任あいさつ

## 解剖学を通じた 人材育成と貢献



京都大学大学院  
医学研究科附属  
総合解剖センター 教授  
**竹林浩秀**

2024年4月1日付で総合解剖センター教授を拝命いたしました。竹林浩秀と申します。芝蘭会員の皆様にご挨拶申し上げます。

総合解剖センターは、解剖学関連の教育と病理解剖、法医学解剖の実施、そして形態学的な研究支援を行うセンターとして1982年に設置され、今回、初めての教授として着任いたしました。学部教育では肉眼解剖学を担当し、卒業後では遺体を用いた外科トレーニング(CST)の実施をサポートしてまいります。

私は1995年に本学を卒業し、研究を志して成宮周先生の教室に大学院進学し、垣塚彰先生のご指導のもと、学位を取得いたしました。その後、鍋島陽一先生の教室にてポストドクとして研究をしていた際に、運動ニューロンとオリゴデンドロサイトの発生に関わるO<sub>2</sub>転写因子を見出しました。生理学研究所、カリフォルニア大学サンフランシスコ校、熊本大学を経て、2011年に新潟大学医学部神経解剖学分野の教授となりました。神経発生学、特にオリゴデンドロサイトの発生、機能、病態に関する研究を行うとともに、不随意運動の発生に関わる神経回路の同定とその治療に関わる研究を



京都大学医学部附属病院 正面玄関

たが、それぞれの場所で素晴らしい出会いを得ることができました。京都大学における新たな出会いや久しぶりの再会を楽しみにしているところです。

京都大学に着任してすぐに解剖学教育が始まりましたが、学生時代に使用した講義室と実習室で教育を行い、たいへん懐かしく感じました。京大医学部医学科の学生に接して強く感じたことは、一人一人の学生が持つ高い能力と大きな可能性です。京都大学には、各分野の第一線で活躍されている先生が身近にいらっしゃるという類まれな環境があります。この素晴らしい環境で学生時代を過ごし、それぞれが持つポテンシャルを生産にわたり発揮してもらえると、京都大学の未来が明るくなるだろうと考えています。そして、その一助になりたいと考えております。

新潟大学には約13年在籍し、現在も兼任しております。新潟大学での担当教室の初代教授は、後に京都大学第16代総長を務められた平澤興先生です。新潟大学の教授室には平澤先生のお写真が飾られていましたので、総合解剖センターで平澤先生の肖像画を拝見した際には、感慨深いものを感じました。これまで研究所や大学など様々な場で研究と教育を行ってまいりました。研究と教育を行ってまいりま

## パブリックと 個人をつなぐ 医療倫理学を



京都大学大学院  
医学研究科  
社会健康医学系専攻  
医療倫理学 教授  
**井上悠輔**

2023年4月より医療倫理学分野に着任しました井上悠輔です。この紙面をお借りして、会員の皆様にご挨拶申し上げます。

私は京都大学文学部を卒業し、医学研究科社会健康医学系専攻に進学しました。京都大学は総合大学ですので、いろいろな人がいますが、私もそうした変わり種の人と言っているのかもしれない

に多くのご指導を受け、公衆衛生をめぐる諸論点に関与しつつ、生命・医療倫理について学んでまいりました。前任地は、東京大学(医科学研究科・公共政策研究分野)であり、武藤香織先生の下、助教、准教授と計14年間おりました。関東には博士後期課程の途中からおり、その他の職歴も合わせ、ほぼ20年ぶりの関西復帰です。

もともと、この領域は、医療現場での倫理(臨床倫理)、研究倫理、そして公衆衛生倫理の3つに分けられることが多いです。私はその中でも研究倫理と公衆衛生をまたぐ課題に関心を持ってきました。特にコホート研究やバイオバンク、死後の研究参加(ブレインバンク)など、個人の自己決定権の可能性と課題に直面することの多いテーマです。また、医療AIや再生医療など、先端医療をめぐる倫理的諸課題に関する研究も担当してきました。学問と実践とのバランスは常に課題ですが、双方向

また、「倫理」には社会的な要請に応える重要な使命もあります。議論に参画できる倫理有識者、倫理審査や審査事務を支え

## 全人的なアプローチで 患者の回復を支援する リハビリ専門医を育成



京都大学医学部附属病院  
リハビリテーション科 教授  
**池口良輔**

令和6年5月1日付で、京都大学医学部附属病院リハビリテーション科教授を拝命いたしました。この場をお借りしまして、芝蘭会員の諸先生方にご挨拶申し上げます。今後とも、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

私は平成5年に京都大学医学部を卒業し、京大病院、静岡県立総合病院、高島市市民病院で研修の後、平成13年に大学院に進学し、末梢神経再生に関する研究で学位を取得し、平成17年にピッツバーグ大学に留学いたしま

した。帰国後は、京大病院、神戸市立医療センター中央市民病院に勤務し、平成26年からは京大病院リハビリテーション科准教授を務めてまいりました。大学院から、神戸市立医療センター中央市民病院(先端医療研究センター)、京大病院勤務を通して、リハビリテーション、末梢神経再生と運動器再建の研究と診療を行なっております。

リハビリテーションは、病気や怪我により身体機能が低下した患者の社会的回復を支援する分野です。他診療科が臓器的に分かれていたとは異なり、リハビリテーション科は、臓器的な機能は低下していても、精神的な社会的な側面にも焦点を当て、全人的なアプローチで患者の回復を支援する診療科です。脳血管障害、運動器疾患、脊髄損傷、神経筋疾患、循環器疾患、呼吸器疾患、内分泌代謝疾患、がん、摂食嚥下障害など、対象疾患も広く、また、急性期、回復期、回復期と生活期までの幅広いフェーズをカバーします。標榜診療科として厚生労働省から認められたのは1996年という、比較的新しい分野です。

日本は世界有数の超高齢社会に突入し、健康やQOLの向上に注目が集まり、自立した生活への復帰や健康寿命の延伸を期待され、リハビリテーションに注目が集まってきました。2018年に開始された新専門医制度でも、19の基本領域の一つに設定され、全国の大学にリハビリテーション科が新設されつつあります。リハビリテーション科専門医は全国に約5000名必要と試算されていますが、現在の専門医数は約2900名であり、専門医育成が急務であります。今後

る人材やその教育者の養成は急務と考えています。こうした活動を、医療倫理学の研究室が国内で初めて設けられた、この京都大学で行う機会が与えられたことを、光栄に思います。会員の先生方には、何卒ご指導のほどよろしくお願ひします。

申しあげます。手続きについて芝蘭会事務局までお問い合わせください。

芝蘭会事務局  
TEL 075-751-2713  
FAX 075-752-4015

### 芝蘭会費納入は自動振替で

平成17年度より芝蘭会費の納入方法として、「銀行口座等からの自動引き落とし」を採用させていただきます。会費納入のお手間が大幅に省かれ、また、会費の二重払いの防止にもつながります。ぜひ、ご利用いただきたくお願ひ

は、リハビリテーションの研究に加えて、京都大学のプログラムで研修したりリハビリテーション科医が一人でも増えて、関連病院へリハビリテーション科専門医を送ることができるよう尽力していく所存です。今後とも、ご指導ご鞭撻賜りますよう、お願ひ申し上げます。

# 免疫ゲノムがん進展説に 基づく免疫ゲノム 精密医療の実現に向けて



西川博嘉

京都大学  
大学院医学研究科 附属  
がん免疫総合研究センター  
がん免疫多細胞系システム  
制御部門 教授

2024年7月1日付でがん免疫総合研究センターがん免疫多細胞系システム制御部門の教授を拝命いたしました西川博嘉と申します。この紙面をお借りして、芝蘭会会員の皆様にご挨拶申し上げます。

私は、1995年に三重大学医学部医学科を卒業して血液腫瘍内科に入局し、3年間の臨床研修のち、1998年に同大学院医学研究科に入りました。当時はがん遺伝子、がん抑制遺

伝子による発がん分子機構の解明が進み、分子標的治療に大きな期待が持たれていました。私は、1940年頃の「J. Genes」の「マウスがある腫瘍株を拒絶すると、同じ腫瘍株を再度接種しても拒絶するが、別の株は拒絶しない」という報告をもとに、がんが免疫系でコントロールされているのではないかと考える様になり、「免疫」という視点から新たながん治療を研究開発したいという思いから、がん免疫研究

を始めました。CD4陽性ヘルパーT細胞を強力に活性化させることで抗腫瘍免疫応答の中心をなすCD8陽性T細胞の効率的な活性化を誘導する研究を進め、がん細胞内に存在する高免疫原性の自己抗原を認識しているCD4陽性T細胞の重要性を明らかにしました。

2015年4月からは、国立がん研究センター研究所に赴任し、腫瘍免疫研究分野長および先端医療開発センター免疫トランスレーショナルリサーチ(TIR)分野長を務めています。さらに2016年4月からは、名古屋大学大学院医学系研究科微生物・免疫学講座分子細胞免疫学の教授をクローズアポイントメントで担当するというやりがいのある立場を頂き、臨床応用が進むがん免疫療法が抱える問題点について、基礎研究からTRRまでを進めてきました。

こうした一連のTreg細胞の研究がきっかけで、「Treg細胞の発見者である本学出身の坂口志文教授のもとで研究を継続する機会を得ました。Treg細胞により抑制されたCD8陽性T細胞に

ついて検討を進め、自己由来のがん抗原特異的CD8陽性T細胞はTreg細胞による免疫抑制により特徴的な不応答(アネルギ)状態に陥ることを示し、免疫学の長年の課題であったアネルギの本態を解明しました。

この度、がん免疫総合研究センターにおいて、2018年にノーベル生理学・医学賞を受賞されました本庶佑センター長のもとでご指導を仰ぎながら研究を進めさせて頂くことになり、大変身の引き締まる思いです。芝蘭会会員の先生方におかれましても、ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

アランゲン・ニユルンベルク大医学部口腔顎顔面外科に留学し、顎骨再建のための骨造成治療および歯科インプラント治療の勉強をさせていただきました。帰国後は歯科インプラントの原材料であるチタンの基礎研究にも着手し、臨床と基礎の両面から顎骨再建とインプラント治療の研究に取り組みでいきました。

2012年からは、カリフォルニア大学ロサンゼルス校歯学部ワイントロップ再建生体工学研究所に留学しました。同研究所は「口腔がんと顔面外傷の生存者のQOL(生活の質)を回復させること」を理念に掲げていました。この理念を知って以来、顎の骨ごと歯を失ったような重症化した患者さんのQOLの回復を実現するインプラント

材料の研究に注力してきました。2019年からは横浜市立大学附属市民総合医療センターで歯科・口腔外科・矯正歯科の部長を務めさせて頂いた。地域医療最後の砦の理念のもと、顎骨や歯肉に生じるあらゆる疾患の手術に取り組み日々を過ごしてまいりました。

また、大病院として健全な歯科医・口腔外科医の育成に努め、京都を中心とした医療圏の歯科口腔保健の充実に貢献できればよいと考えておりますので、芝蘭会員の先生方には、どうぞ御指導・御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

この度はこのような寄稿の機会をいただいたことに感謝申し上げますとともに、皆様の健康を祈念して本稿を終えさせていただきます。

## 地域医療の充実と、 高度医療の両立を目指す



廣田 誠

京都大学大学院医学研究科  
口腔外科 教授

2024年7月1日付で、医学研究科感覚運動系外科学講座口腔外科学分野の教授を拝命いたしました廣田 誠と申します。芝蘭会会員の皆様にご挨拶させていただきます。

私は1998年に日本大学松

戸歯学部を卒業後、横浜市立大学大学院医学研究科に進み、病理学教室に所属して口腔粘膜疾患の研究で学位を取得しました。2005年に日本口腔外科学会専門医を取得し、翌年にドイツの南部バイエルン州にあるエ

ムとして取り進む課題であり、かかりつけ歯科との連携を促進するためのネットワーク作りを進め、京大病院にて治療を受ける患者さんの口腔内の健康維持に寄与できるよう全力で取り組んでまいります。

また、大病院として健全な歯科医・口腔外科医の育成に努め、京都を中心とした医療圏の歯科口腔保健の充実に貢献できればよいと考えておりますので、芝蘭会員の先生方には、どうぞ御指導・御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

この度はこのような寄稿の機会をいただいたことに感謝申し上げますとともに、皆様の健康を祈念して本稿を終えさせていただきます。

## 退任あいさつ

### 愚公移山



萩原正敏

京都大学 創薬医学講座、  
がん免疫総合研究センター、  
成長戦略本部  
特任教授

私は2010年に東京医科大学の難治疾患研究所から本学へ異動し、形態形成機構学教室(旧第三解剖学講座)の第7代教授として教育研究を担当させて頂きました。2024年3月31日付で退職致しましたので、ご挨拶申し上げます。

長年塗り重ねられたペンキの一番下層の色を調べたり、京大人文科学研究科の図書室に吊るされていたシャネルアを移設したりして、基礎医学記念講堂として蘇らせました。

階段教室の下にあった解剖図譜などの倉庫は、医学部資料館に改装し、芝蘭会の皆様の懐かしい写真や本学に残る貴重な資料などを展示しています。ご興味のある方は、京大ホームページ「ザッツ・京大」をチェックしてみてください。

肉眼解剖学を学部生に教える一方で、RNAスプライシング制御機構に関する基礎研究にも従事致しました。先端的な医学・生命科学の研究を推進するには、質量分析装置や次世代シーケンサーなど高価な研究機器が必要

また、副研究科長として、総合解剖センターや病理系研究室の入るF棟、および校門脇のI棟の耐震改修にも携わりました。法令に定められた耐震のための外壁補強だけではなく、内装も一新する全面改修を選択したため、皆様の研究・教育活動の妨げにならないように移転や工事日程を調整したり、総合解剖センター創立以来収蔵されてきた人体標本などを丁寧に扱い

また、副研究科長として、総合解剖センターや病理系研究室の入るF棟、および校門脇のI棟の耐震改修にも携わりました。法令に定められた耐震のための外壁補強だけではなく、内装も一新する全面改修を選択したため、皆様の研究・教育活動の妨げにならないように移転や工事日程を調整したり、総合解剖センター創立以来収蔵されてきた人体標本などを丁寧に扱い



基礎医学記念講・医学部資料館

\* <https://www.hatsuprkyoto-u.ac.jp/2017/06/27/2531/>

# 退任あいさつ

## アカデミアで四半世紀 生きてきて思っていること



古川 寿亮

京都大学 成長戦略本部  
特定教授

2024年3月で健康増進・行動学分野教授を定年退職しました。古川寿亮です。京都大学医学研究科では13年と9ヶ月末席を汚させていただきましたが、私なりの努力はいたしました。周囲の皆さまのお力を借りて何とか定年まで勤めさせていただき、ありがとうございました。御礼申し上げます。これは単なる挨拶ではなく、

「退任のご挨拶」では、この14年間の経緯などを述べさせていただきます。私がお話したいところは、私からアカデミアに入り、認知行動療法、臨床疫学、そしてスマートフォンアプリ開発に従事するようになったのは、The Lancet PsychiatryのProfileのインタビュー記事や、Am J Geriatric Psychiatryの自伝に掲載されていますので、ご興味がおありの方は、そちらをご覧ください。ただ、私には、お話を聞いただけでは、同窓会報という場をお借りして、14年間の教授職のあいだに感じたさまざまな雑念、妄想、暴論をシェアさせていただきます。私の力ではとうてい及ばなかった諸点について、同窓の皆様のご批判や、できればご奮起を期したく存じます。

読者の皆様にはさまざまな世代の方がいらっしゃると思いますので、まずは私の世代的な立ち位置を振り返ります。1958年に生まれた私は高校時代に米国に留学し、そこでは友人から「あ、Hondaね、オートバイに屋根がついた車ね」と言われ、その6年後フランスに留学したら「ベンツよりもホンダの方が良い車だ」と言われる変化を経験しました。

西欧に追いつけ追い越せで来たつもりでいたら、息子の世代が中学生の頃に「もうアメリカから学ぶことはない」と言われて絶句し、そして最近同じく息子の世代から「僕たちって落ちぶれてゆく日本しか知らないんだよね」と言われて、またまた言葉を失うという世代でした。

そういうアップダウンの激しい半世紀を経験した私の雑感を徒然に列挙します。

①「世界に伍する」と言っている間は、せつたいに世界に追いつかないだろうなあ。世界はとつともない速度で、かつ加速度的に変化しているの、周りを追いついたときには周りは別世界に行っているでしょう。

② T大 K大 スキームの超克。T大 K大 と言って、近年は以前よりTVにも出るようではあります。世界は友人と話して、それで分かってくれた人はまず一回も経験ありません。同じ頃米国に留学した友人が、T大に入学して米国の友人に「日本のハーバードに入った」と説明したという話を聞いて、とても心寂しかったのを今でも思い出します。それぞれの地域には必ずトップがあるけど、日本のような小さな国でトップであることを鼻にかけて、人間としてどれだけの意味があるのだろうか。

③ これは精神医学だからかも知れませんが、世界のトップ雑誌に投稿して、何度も何度も相手にされていないという感覚を味わいました。差別じゃないかと感じることも何度かありました。

④ こんなど目に、若い世代を遣わせない、彼らがそういう思いをいだかず、済むような存在感を作るのが、私の世代的義務だと思つてやってきましたが、残念ながら力及ばなかったようです。医学の他の分野は異なるかも知れません。

⑤ 日本で研究費を取るのも、長らく苦労しました。日本国内の仲良し倶楽部で決めているような印象をいただいたこともありました。

⑥ 海外の競争的研究費の審査に、海外の査読者を入れることは出来ないのでしょうか。審査する側が世界レベルでないところで世界レベルの研究が出てくるで

⑦ 日本は競争的研究費の審査に、海外の査読者を入れることは出来ないのでしょうか。審査する側が世界レベルでないところで世界レベルの研究が出てくるで

⑧ 日本は競争的研究費の審査に、海外の査読者を入れることは出来ないのでしょうか。審査する側が世界レベルでないところで世界レベルの研究が出てくるで

⑨ 日本は競争的研究費の審査に、海外の査読者を入れることは出来ないのでしょうか。審査する側が世界レベルでないところで世界レベルの研究が出てくるで

⑩ 日本は競争的研究費の審査に、海外の査読者を入れることは出来ないのでしょうか。審査する側が世界レベルでないところで世界レベルの研究が出てくるで

⑪ 日本は競争的研究費の審査に、海外の査読者を入れることは出来ないのでしょうか。審査する側が世界レベルでないところで世界レベルの研究が出てくるで

世界ランキング1桁の大学になりたいです。日本復活なんて言っている間は、絶対に復活しないし、1990年代の日本と同じものを今や誰も必要としないから。

② T大 K大 スキームの超克。T大 K大 と言って、近年は以前よりTVにも出るようではあります。世界は友人と話して、それで分かってくれた人はまず一回も経験ありません。同じ頃米国に留学した友人が、T大に入学して米国の友人に「日本のハーバードに入った」と説明したという話を聞いて、とても心寂しかったのを今でも思い出します。それぞれの地域には必ずトップがあるけど、日本のような小さな国でトップであることを鼻にかけて、人間としてどれだけの意味があるのだろうか。

③ これは精神医学だからかも知れませんが、世界のトップ雑誌に投稿して、何度も何度も相手にされていないという感覚を味わいました。差別じゃないかと感じることも何度かありました。

④ こんなど目に、若い世代を遣わせない、彼らがそういう思いをいだかず、済むような存在感を作るのが、私の世代的義務だと思つてやってきましたが、残念ながら力及ばなかったようです。医学の他の分野は異なるかも知れません。

⑤ 日本で研究費を取るのも、長らく苦労しました。日本国内の仲良し倶楽部で決めているような印象をいただいたこともありました。

⑥ 海外の競争的研究費の審査に、海外の査読者を入れることは出来ないのでしょうか。審査する側が世界レベルでないところで世界レベルの研究が出てくるで

⑦ 日本は競争的研究費の審査に、海外の査読者を入れることは出来ないのでしょうか。審査する側が世界レベルでないところで世界レベルの研究が出てくるで

⑧ 日本は競争的研究費の審査に、海外の査読者を入れることは出来ないのでしょうか。審査する側が世界レベルでないところで世界レベルの研究が出てくるで

⑨ 日本は競争的研究費の審査に、海外の査読者を入れることは出来ないのでしょうか。審査する側が世界レベルでないところで世界レベルの研究が出てくるで

⑩ 日本は競争的研究費の審査に、海外の査読者を入れることは出来ないのでしょうか。審査する側が世界レベルでないところで世界レベルの研究が出てくるで

# 同窓会だより

2024年6月1日(土)・2日(日)、昭和43年卒の同窓会が小生(邊見)の故郷・徳島で開かれた。前年にANAクラウンプラザホテル京都で開催した卒業55周年記念の同窓会で、徳島開催を希望する者が多く、地方開催の最後になると思い幹事を引き受けた。

初日はJRクレメントで、学友3人(井上良一氏、藤本隆敏氏、中原知子)を偲ぶ会を行った後、学友26名による全員スピーチで近況を語り合った。ご婦人12名も加わり、計38名にご参加いただいた。



十郎兵衛屋敷で阿波人形浄瑠璃を見学し、眉山ロープウェイで市街眺望を楽しんだが、あいにく曇り空で、淡路・和歌山・神戸方面は見えず。阿波踊り会館では飛び入りで踊った方もいて久しぶりに50数年前に戻った2日間であった。

(文責・幹事 齋藤信雄、三浦賢佑、邊見公雄)



京都大学医学部昭和43年卒業生 卒後56年同窓会 令和6年6月1日 於JRホテルクレメント徳島

# 支部だより

## 三重

### 低侵襲化を重視して 進化しつつける 脳疾患の外科治療

令和6年7月7日(日)、三重県津市のアスト津にて、令和6年度芝蘭会三重支部総会が開催されました。会支部長の井上貴博先生の進行のもと行われました。物故会員への黙祷の後、井上先生よりご挨拶をいただき、決算、収支予算案、役員人事、次回総会の日時などについての協議がなされました。

その後、京都大学大学院医学研究科脳神経外科教授の荒川芳輝先生から京大医学部の現状報告がありました。新任教授陣のご紹介にはじまり、がん免疫総合研究センター「プリストル・マイヤーズスクイブ棟」の新設など、学内のトピックスについて説明してくださいました。

次に、「脳神経外科領域の疾患と治療の最新知見」という演題で荒川先生による特別講演が行われました。前半は、荒川先生のご経歴のお話をしてくださいました。その中で、覚醒下手術や内視鏡手術といった最新の技術を用いた手術を、実際の動画をを用いて説明されており、とても興味深かったです。

その後、脳腫瘍疾患、血管疾患、脳機能疾患、脊椎脊髄疾患のトピックについてお話がありました。以下項目に分けて記載します。

●脳腫瘍疾患  
はじめに脳腫瘍疾患について

の話がありました。脳腫瘍疾患を発症するのはおよそ10万人に20人程度ですが、その種類は150以上存在し、とても診断が難しいものとなっています。

脳腫瘍は、他のがんのように病期分類がなく、WHOが分類する1-4の「WHOグレード」によって悪性度が分類されています。グレード1は良性に近く、手術で摘出すれば再発はまれです。下垂体腺腫、神経鞘腫、頭蓋咽頭腫がこれにあたります。一方で最も悪性度が高いグレード4の腫瘍は予後不良なものとなります。中枢神経系リンパ腫、胚細胞腫瘍、髄芽腫、膠芽腫がこれにあたります。髄膜腫はほとんどグレード1ですが、グレード2や3のものもあります。

脳腫瘍の分類にあたっては、組織分類をする時代から遺伝子分類をする時代に移っています。100年以上、病理組織の観察による分類が用いられてきましたが、最近の遺伝子分析によってその是非が問われ、分子分類が導入されました。

また近年は、AIでも脳腫瘍を分類できるようになってきました。メチル化の状態をAIに落とし込むことで脳腫瘍分類が可能となります。ドイツのがんセンターのホームページにはメチル化の状態をアップロードするサイロッドしてみると、どのような腫瘍かを分類してくれます。

また、頭蓋底腫瘍に対する手術の進歩により、術中MRIで内部の様子を撮影しながら手術を進めることができることを、実際の動画を交えて説明されていました。

●血管疾患  
続いては、血管疾患についてです。最先端の動脈瘤治療にWEB (Woven Endo Bridge) があります。これは、動脈瘤が発生している箇所に風船を膨ら

(次ページに続く)



ませる治療法で、30分程度で終わってしまうほど簡便な治療です。また、動脈瘤に対する治療として、以前は開頭クリッピング療法などが主流でしたが、クリッピング術では治療できない動脈瘤があることや、そもそも手術として難しいという問題点がありました。しかし、そこにフローダイバーター法といった治療が出てきて、治療にも革命が起きています。

また、末梢の血管に存在する血栓を回収する方法として、**MeVos**が誕生しました。これはステントを末梢の脳血管まで進めて、血栓を絡めて吸引するものです。これによって機械的血栓回収療法の適応範囲が拡大しました。末梢の血栓を回収できることで、失語や麻痺を改善できます。慢性硬膜下血腫の中硬膜動脈瘤塞栓術については

NBCA (アロンアルファ) を注入して塞栓する治療も出てきています。

モヤモヤ病という病名も血管疾患のひとつです。これは内頸動脈末梢の狭窄により、見た目がモヤモヤした血管が現われて、虚血したのちに出血してしまいがちです。京大では、頭の皮膚の血管のバイパスや間接型のバイパスを行って、吻合すると出血リスクが減るそうです。京大病院では「モヤモヤ病支援センター」を設け、トータルサポートも行っています。

●脳機能疾患

続いては、脳機能疾患についてです。三叉神経痛による顔面痙攣は血管圧迫障害によって起こるものであり、微少血管減圧術が施されています。パーキンソン病やてんかん、うつ病などが脳機能疾患の例として挙げ

られますが、その治療としては電気刺激を行うなどのニューロモデュレーション療法が最近では主流です。これは低侵襲な治療であり、効果も高いそうです。難治性てんかんの根本的な治療として、外科手術があります。最近では、てんかんの原因となっている脳領域(てんかん焦点)の局在を調べるためのSEEGと呼ばれる検査法も開発され、脳機能疾患に対するアプローチも幅が広がっています。

●脊椎脊髄疾患

最後のトピックは、脊椎脊髄疾患についてです。脊椎脊髄疾患患者が多い疾患で、新規患者さんが年に5000人ほどいます。その多くが高齢者(70代など)の転倒によって起こるものです。頸髄損傷も合併することが多く、完治させる方法もないので難しい疾患となっています。第四頸髄レベルが日常生活動作(ADL)の分水嶺となっており、手術の目的は機能回復ではなく、二次性の脊髄損傷を防ぐことが主眼で、リハビリテーションによる機能回復が脊髄損傷に対するアプローチとなっているのが現状です。

脊髄損傷の亜急性期(31日以内)の治療として、再生細胞を使った治療が近年注目されています。この再生細胞として使われるのが、間葉系幹細胞とiPS細胞です。現在の到達点としては臨床評価の段階に入っていますが、問題点として、治療のメカニズムが分かっている点などが挙げられます。

脊椎変性疾患に対する低侵襲治療もホットトピックとなっています。脊椎変性疾患では、自覚症状は疼痛関連が上位を占めており、有病者は580万人を超えているので、身近な疾患となっています。この疾患に対する治療は、膀胱直腸障害などの絶対的手術適応の場合でなければ、患者さんに治療の方法を選択していただいているそうです。

昔は手術をする際に皮膚切開をしていましたが、今では内視鏡で手術する低侵襲な方法も開発されています。また治療の仕方も、除圧するか固定するか2通りに分かれるそうです。例えば、内視鏡による椎弓切除を行い、除圧をすることで、入院した患者さんに2、3日で退院してもらうことができます。内視鏡下脊椎固定術も具体的な方法としてあります。

これまでの内容をまとめると、脳疾患の外科治療は進化していること、またその進化は低侵襲化の方向に進んでいること、それによって安全で的確な治療が可能となっていることが挙げられます。私たちがこの講演を拝聴させていただく前は、脳外科の手術は積極的に開頭するメージがあつたのですが、実際は内視鏡なども積極的に使われ、低侵襲で安全な治療がどんどん広がっているのだと、驚きました。

今回、芝蘭会三重支部総会と荒川先生による特別講演取材させていただきましたが、外科医の方々の活躍、現在注力している取り組みなど、ここでしか聞けないリアルな話にとても刺激を受けました。外科の手術の幅がとて広がっていると感じました。荒川先生、ご講演たいへんありがとうございました。

また、芝蘭会三重支部の先生方におかれましては、今回このような会にお招きいただき誠にありがとうございます。三重支部の先生方には会食をさせて講演会終了後には会食をさせていただきますました。たいへん美味な懐石料理をいただきながら、興味深いお話を拝聴することができ、とても刺激的な時間を過ごすことができました。

最後になりましたが、このような素晴らしい会にお招きくださったことに最大限の感謝の意をもって、芝蘭会三重支部の報告を終わらせていただきます。

(文責・4回生 反田武志)

心不全の予後改善、再入院率低減をもたらす SGLT2阻害薬の可能性

令和6年6月8日(土)、大阪市のホテルグランヴィア大阪にて、令和6年度芝蘭会大阪支部総会が開催されました。会は大坂赤十字病院小児科部長の藤野寿典先生の進行のもと行われました。物故会員への黙祷の後、芝蘭会支部長・大阪赤十字病院院長の坂井義治先生よりご挨拶をいただき、議長選出、決算、収支予算案、役員人事などについての協議がなされました。

その後、京都大学大学院医学研究科循環器内科学教授の尾野巨先生から京大医学研究科・医学部の現状報告がありました。

医学研究科・医学部の運営体制と新任教授陣のご紹介にはじまり、京大病院構内、医学部構内、その周辺について、写真を交えて現状をお話しいただきました。加えて、KMSIFUND(研究活動支援基金)について説明してくださりました。

次に、「心不全治療の現状と将来展望」という演題で尾野先生

生による特別講演が行われました。心不全治療の現状、今後の課題についてお話しいただきました。

●心不全治療の現状

心不全は、リスクファクターから始まり、心血管疾患や腎臓を含む全身の組織障害を起こすもので、感染症とは全く異なる経路を辿るものですが、「心不全はパンデミック」とも言われるそうです。その理由として、①患者数が多い、②死亡率が高い、③入院治療が必要で再入院を要することが多い、の三点が挙げられるとのことでした。

日本は心不全の入院日数が長いと言われておりましたが、入院日数は減ってきてはいるとのことでした。ただし、一年死亡率や、三十日後、一年後の再入院率は変わっていないというデータがあるそうです。これらのデータから、尾野先生は「急性心不全を起した後の中長期の管理がまだまだ十分でない」と述べられていました。

心不全の治療に関しては、過去40年にわたり、左心室の収縮機能(LVEF)が低下した心不全(HF: LVEF < 40%)の治療研究が進んでおり、ACE阻害薬やβ遮断薬、MRA、ARNI、SGLT2阻害薬などが順番に効果を示してきたとのことでした。今回の講演の前半では、このうちSGLT2阻害薬に焦点を当てて深掘りをされました。

●SGLT2阻害薬の有効性

SGLT2阻害薬に関する臨床試験は多数行われており、その中でも糖尿病の標準治療を行っている患者を、プラセボを投与する群とSGLT2阻害薬を投与する群とに分けて比較した結果、後者の方が心不全による入院が少ないことが明らかになったという報告について、はじめにお話しくださいました。その後、糖尿病の有無によらず、SGLT2阻害薬が心不全の

予後を改善することが示されたとのことでした。

別の試験では、左心室の収縮能力が保たれた心不全(HF: LVEF > 40%) 対しても同様に予後が改善することが示されました。また、2023年の研究で、SGLT2をコードする遺伝子の変異と心不全の関係について、変異を持つ方が心不全のリスクが少ない(オッズ比0.9)ことが判明し、このことからSGLT2阻害薬は心不全に対して非常に強力な薬剤であることが考えられます。

米国のガイドラインでは、HFpEFに対してSGLT2阻害薬がクラス2aで推奨されており、ヨーロッパのガイドラインにおいても、HFpEF等に対してクラス1、エビデンスレベルAで推奨されているため、日本は心不全のガイドラインも同様に変わっていくのではないかと述べられていました。

また、心不全に対してARNI、β遮断薬、MRA、SGLT2阻害薬の4剤を使うことが推奨されており、この中でSGLT2阻害薬は血圧の低下といった副作用が少なく使いやすいため、中止されることも少ないとのことでした。また、これに加え、ベルシグアトという新たな薬剤も登場して、Quintuple therapyと呼ばれる5剤の使用も考慮されているとのことですが、尾野教授は「患者さん全員が必ずしも5剤を使えるとは限らず、患者さんひとりひとりの病態を考慮して最善の治療を行うことが重要だ」と述べられました。

●KUS121の可能性

続いて、京大大学院生命科学研究所の垣塚彰先生が開発されたKUS (Kyoto University Substance) 121が新規の心不全治療薬として使える可能性についてお話をされました。KUS121は、細胞内のVCP蛋白と呼ばれる蛋白の

再入院率低減をもたらす SGLT2阻害薬の可能性

心不全の予後改善、再入院率低減をもたらす SGLT2阻害薬の可能性

再入院率低減をもたらす SGLT2阻害薬の可能性

再入院率低減をもたらす SGLT2阻害薬の可能性

再入院率低減をもたらす SGLT2阻害薬の可能性

ATPアーゼのみを選択的に抑制することによって細胞内のATP濃度を維持する働きを持つとのこと。ATPを可視化した心不全モデルのマウスや高頻度ペーシングによる心不全モデルのイヌなどをを用いた実験により、KUS121によって心筋細胞のエネルギー不足が改善し、左室の収縮能、拡張能がともに改善することが判明したそうです。また、KUS121を長期で投与することによって心肥大が抑制され、線維化が改善し、心機能の低下を防ぐことができるそうです。

その他の実験では、KUS121は細胞内カルシウム濃度の増強作用を持たないことが判明しました。一方で、カテコラミンは細胞内カルシウム濃度の増強作用を持つため、不整脈や心筋の線維化に繋がり、長期予後の改善は見込めません。そのためKUS121を用いることによつて、カテコラミンを使用している重症心不全患者からカテコラミンの脱却を図ることができる可能性が示唆されているそうです。

今回、芝蘭会大阪支部総会と尾野先生による特別講演取材させていただきましたが、既存の治療薬の新たな効能を発見した話や、新規治療薬の話など、ここでしか聞けない循環器内科のホットトピックにとっても刺激を受けました。内科の進歩は目覚ましく、深刻な心不全患者に対してより負担の小さい治療が増えているのだと感じました。尾野先生、ご講演ありがとうございました。

また、芝蘭会大阪支部の先生方におかれましては、今回このような会にお招きいただき誠にありがとうございました。先生方の様々な病院での活躍は目覚ましく、ここ大阪から芝蘭会を盛り上げようと尽力されていました。

(文責・4回生 反田武志)

人事異動

R6.3.31	萩原 正敏	辞任	形態形成機構学教授 → 医学研究科創薬医学講座(寄附) 寄附講座教員(特任教授兼客員教授)/成長戦略本部研究員(非常勤)
R6.3.31	松田 道行	辞任	病態生物医学教授 → 生命科学研究所研究員(非常勤)
R6.3.31	木村 亮	辞任	形態形成機構学准教授 → 大阪大学大学院連合小児発達学研究所生命情報学教授
R6.3.31	實吉 岳郎	辞任	システム神経薬理学准教授 → 東京工業大学生命理工学院教授
R6.3.31	岡田 知久	辞任	脳機能総合研究センター脳機能イメージング准教授 → 理化学研究所脳神経科学研究センター機能的磁気共鳴画像測定支援ユニットユニットリーダー
R6.3.31	山本 憲	辞任	医学教育・国際化推進センター学部教育部門講師 → 順天堂大学健康データサイエンス学部教授
R6.3.31	佐藤 俊哉	辞任	医療統計学教授 → 情報・システム研究機構統計数理研究所特任教授
R6.3.31	古川 壽亮	辞任	健康増進・行動学教授 → オープンイノベーション機構特定教授
R6.3.31	吉田 都美	辞任	薬剤疫学准教授 → 筑波大学医学医療系サイバーメディシン研究センター教授
R6.3.31	中島 健	辞任	医療倫理学准教授 → 大阪府立病院機構大阪国際がんセンター部長
R6.3.31	高橋 良輔	辞任	臨床神経学教授 → 学術研究展開センター特定教授
R6.3.31	八角 高裕	辞任	発達小児科学准教授 → エコチル京都ユニットセンター特定教授
R6.3.31	高田 正泰	辞任	乳腺外科学准教授 → 関西医科大学乳腺外科学講座主任教授
R6.3.31	石井 暁	辞任	脳神経外科学准教授 → 順天堂大学脳神経血管内治療学講座教授
R6.3.31	松原 雄	辞任	腎臓内科学講師 → 田附興風会医学研究所北野病院腎臓内科部長
R6.3.31	江川 形平	辞任	皮膚科学講師 → 鹿児島大学医学部皮膚科教授
R6.3.31	平松 英文	辞任	発達小児科学講師 → 近畿大学医学部附属病院小児科講師
R6.3.31	堀江 昭史	辞任	婦人科学・産科学講師 → 田附興風会医学研究所北野病院産婦人科部長
R6.3.31	大角 明宏	辞任	呼吸器外科学講師 → 田附興風会医学研究所北野病院呼吸器外科主任部長
R6.3.31	坂本 道治	辞任	形成外科学講師 → 同特定准教授
R6.4.1	竹林 浩秀	採用	新潟大学大学院医歯学総合研究科教授 → 総合解剖センター 教授
R6.4.1	THUMKEO, Dean	採用	医学研究科創薬医学講座(寄附) 特定准教授 → 医学教育・国際化推進センター国際化推進部門教授
R6.4.1	細川 智永	採用	システム神経薬理学特定講師 → 同准教授
R6.4.1	大石 直也	採用	附属病院精神科神経科特定准教授 → 脳機能総合研究センター脳機能イメージング准教授
R6.4.1	宮尾 昌	昇任	法医学講師 → 同准教授
R6.4.1	井上 悠輔	採用	東京大学医学研究所附属ヒトゲノム解析センター准教授 → 医療倫理学教授
R6.4.1	増田 慎三	採用	名古屋大学乳腺内分泌外科教授 → 乳腺外科学教授
R6.4.1	飯塚 裕介	採用	静岡市立静岡病院放射線治療科主任科長 → 放射線腫瘍学・画像応用治療学講師
R6.4.1	中谷 航也	採用	倉敷中央病院放射線診断科部長・核医学診療部長兼画像診断センター副センター長 → 画像診断学・核医学講師
R6.4.1	横山 顕礼	昇任	腫瘍内科学助教 → 同講師
R6.4.1	井澤 和司	昇任	総合周産期母子医療センター助教 → 発達小児科学講師

R6.4.1	小木曾 聡	昇任	肝胆臓・移植外科学助教 → 同講師
R6.4.1	千草 義継	昇任	婦人科学・産科学助教 → 同講師
R6.4.1	豊 洋次郎	昇任	呼吸器外科学助教 → 同講師
R6.4.1	津下 到	昇任	形成外科学助教 → 同講師
R6.4.30	原田 範雄	辞任	糖尿病・内分泌・栄養内科学准教授 → 福井大学医学系部門医学領域病態制御医学講座内分泌・代謝内科学分野教授
R6.5.1	三好 智子	採用	岡山大学学術研究院 特任准教授 → 医学教育・国際化推進センター学部教育部門 准教授
R6.5.1	SAHKER, Ethan Kyle	昇任	医学教育・国際化推進センター国際化推進部門助教 → 同講師
R6.5.1	横井 秀基	昇任	腎臓内科学講師 → 同准教授
R6.5.1	梅田 雄嗣	昇任	発達小児科学講師 → 同准教授
R6.5.1	遠藤 雄一郎	昇任	皮膚科学助教 → 同講師
R6.5.1	池口 良輔	採用	リハビリテーション科准教授 → 同教授
R6.6.1	菊池 隆幸	昇任	脳神経外科学講師 → 同准教授
R6.6.1	加藤 格	昇任	総合周産期母子医療センター助教 → 発達小児科学講師
R6.6.30	宇座 徳光	辞任	内視鏡部准教授 → 神戸大学大学院医学研究科内科学講座消化器内科学分野・特命教授
R6.6.30	南口 早智子	辞任	病理部准教授 → 藤田医科大学教授
R6.7.1	西川 博嘉	採用	名古屋大学大学院医学系研究科教授 → がん免疫総合研究センターがん免疫多細胞システム制御部門教授
R6.7.1	中川 正宏	採用	次世代臨床ゲノム医療講座(産学共同) 特定准教授 → 腫瘍生物学准教授
R6.7.1	廣田 誠	採用	横浜市立大学附属市民総合センター歯科・口腔外科・矯正歯科部長 → 口腔外科学教授
R6.7.1	村岡 勇貴	採用	眼科助教 → 同特定講師
R6.7.1	采野 優	採用	腫瘍内科医員 → 緩和医療科特定講師
R6.7.1	村田 浩一	昇任	リウマチ性疾患先進医療学講座(寄附) 助教 → 同特定講師
R6.7.31	横井 秀基	辞任	腎臓内科学准教授 → 熊本大学大学院生命科学部腎臓内科学講座教授
R6.7.31	豊本 雅靖	辞任	難病創薬産学共同研究講座(産学共同) 特定講師 → 創薬イノベーション講座特定准教授
R6.7.31	小金丸 聡子	辞任	脳機能総合研究センター特定准教授 → 同センター 研究員(非常勤)
R6.8.1	大川 将和	昇任	脳神経外科助教 → 同講師

訂正とお詫び

芝蘭会報第215号8頁の「人事異動」の記事に誤りがありました。

R6.3.1 矢部 大介

【誤】岐阜大学大学院医学研究科分子・構造学講座内分泌代謝病態学分野教授

【正】岐阜大学大学院医学系研究科糖尿病・内分泌代謝内科学教授

会員ならびに関係者の皆様には、大変ご迷惑をおかけいたしました。

謹んでお詫びいたします。

謹んでご冥福をお祈りいたします

日付はご逝去日

井上 文雄	昭和20年卒	平成12年7月	山田 敦	昭和29年卒	令和5年12月10日	片岡 善夫	昭和41年卒	令和5年12月15日
行政 愛雄	昭和22年卒		長尾 愛彦	昭和30年卒	令和5年7月18日	木村 徹	昭和43年卒	令和6年8月15日
大家 康三郎	昭和23年卒	令和4年1月25日	遠藤 治郎	昭和31年卒	令和6年6月14日	今井 龍弥	昭和45年卒	令和6年5月31日
斎藤 義雄	昭和23年卒	令和5年8月9日	金山 明夫	昭和32年卒	令和6年5月25日	西村 直卓	昭和46年卒	令和6年7月22日
辻井 和一郎	昭和25年卒	令和6年4月1日	西 祥太郎	昭和31年卒	令和6年9月1日	牧原 寛之	昭和47年卒	
上田 博之	昭和25年卒	令和6年2月	狩野 正弘	昭和33年卒	令和6年4月8日	夏目 重厚	昭和48年卒	令和6年4月16日
大住 英夫	昭和26年卒	令和6年6月23日	後藤 欣生	昭和35年卒		山本 弘之助	昭和49年卒	令和6年4月29日
丸野 義和	昭和26年卒	令和6年1月6日	森 崇英	昭和35年卒	令和5年11月4日	北浦 大作	昭和56年卒	令和6年4月9日
酒井 豊和	昭和26年卒	令和4年8月3日	小西 優介	昭和35年卒	令和4年12月21日	大浦 好一郎	昭和57年卒	令和4年3月22日
原田 禹雄	昭和26年卒	令和6年4月28日	芹生 郁子	昭和35年卒	平成24年5月28日	藤田 準	昭和57年卒	
岩井 一	昭和28年卒		荒木 裕	昭和37年卒	令和5年12月11日	三浦 律男	教室会員 外科	令和6年6月10日
齋藤 明寺 央	昭和28年卒	令和6年5月1日	東郷 實	昭和37年卒	令和6年8月19日	三浦 昌生	教室会員 眼科	
鈴木 克義	昭和28年卒	令和5年3月12日	石本 秋稔	昭和38年卒	令和6年5月2日	田原 紀子	教室会員 小児科	令和5年8月
堀 了平	昭和28年卒	令和5年2月2日	西野 幸典	昭和40年卒	令和6年5月14日	米田 俊一	教室会員 脳外	
三河 春樹	昭和29年卒	令和6年4月10日	藤田 雄三	昭和40年卒	令和5年10月	戸谷 誠之	教室会員 臨床検査医学	令和6年1月15日

会員計報

制作協力 京都通信社  
デザイン 納富進

原稿募集

芝蘭会報は、会員の皆様の情報交換・意見発表の場であり、支那活動・クラス会、会員の著書の紹介(自薦・他薦)及び医学・医療等に関するご意見等を寄稿ください。なお、送付先は FAX(075-752-4015) または Email (info@shinkanai.or.jp) へお願いします。また、原稿の採用及び掲載時期については、編集委員会が決めています。ご了承ください。

芝蘭会報編集委員会

委員長 高折見史  
委員 中村保幸、吉岡秀幸、清川岳彦、園部誠、松村由美、甲斐亜沙子、諫田淳也

芝蘭会誌誌部

顧問 高折見史  
部員

(6回生) 三宅大河、小林空輝、小澤向陽、野洲春菜  
(4回生) 大島輝、福田大智  
反田武志

(3回生) 奥村圭一郎、田中春輝、木田雄大、周新陽、永山幹太、伊東和央

(2回生) 石田匠、中塚昌宏、大神心太郎、木村淳、浅野優之助

芝蘭会事務局

事務局長 山田均  
管理課長 森勝二  
総務課 秋山和美